

ポストコロナを見据えた未来の大学教育の姿

——オンラインを活用した新たな大学教育の可能性

コロナ禍がもたらしたもの

大学は、コロナ禍による劇的な教育環境の変化に対応しながら、教育の質と効果や、学生の満足度などの検証を間断なく行ってきた。オンライン教育の効果検証はまだ十分ではないという指摘もあるが、教員の実感の中で、これまでに気付くことのなかった(正確には気付く機会がなかった)新たな教育効果が存在することは、ほぼ合意されているように思われる。一方、学生の満足度については、文部科学省のアンケートにおいて57%が肯定的(「満足」或いは「ほぼ満足」と回答した。この数字を好意的に見る向きもあるが、4割強の学生が「満足していない」現状は明らかに改善の余地が大きい。ただ、本来は対面授業で行いたいと教員が考える授業もオンライン授業とせねばならない現況下では、オンライ

ン授業の総体を評価することは難しいであろう。今後は、オンライン環境による新しい教授法の開発、既存の授業の効果拡大という方法論と、教育効果そのものの検証に論点は移行していくものと思われる。大学にとって、コロナ禍がもたらしたものは、教育の質や効果を複眼的に捉えなおすという機運であるかもしれない。

新しい大学教育の場

大学教育における重要な場の要件の筆頭に、多様性の中での議論が挙げられよう。異質のぶつかり合い、自己を相対化しながら、時に意見を戦わせ、時に合意形成を試みることで、事象や課題の理解を縦横に深めることができる。この意味での効果的なオンライン教育の一事例として、国際協働学習(COIL: Collaborative Online International Learning)を紹介した

上智大学学長

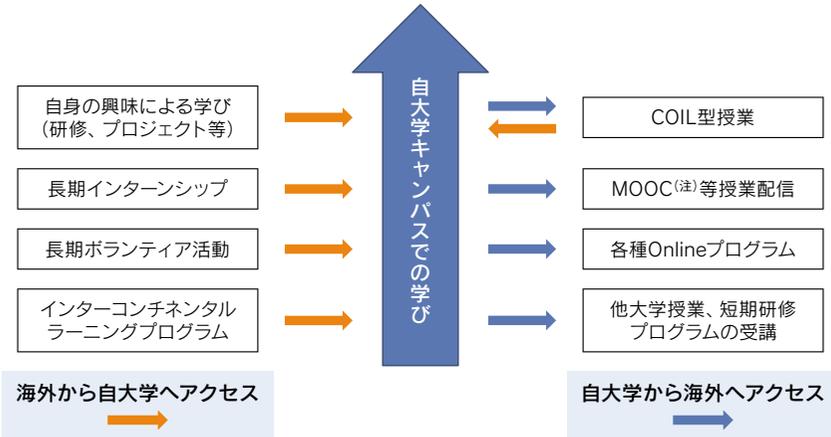
曄道佳明

てるみち よしあき



い。COIL型授業は、教員が自身の授業と海外大学の授業とを交流させ、両大学の学生間の議論や海外大学の教員との対話を通して、新たな学びの環境を与え効果を高めようというものである。必然的に均質的ではない学びの環境が生まれ、多様な価値観に触れることから、授業効果の増大が期待される。一方、教員にとってはなかなか骨の折れる場づくりである。講義の内容、難易度、学生のコミュニケーション力のレベル合わせなど、準備段階での先方教員との協働に大きなエネルギーを要する。自身の、自大学の、ひいては日本の大学の授業を世界の土俵に乗せて吟味を行う作業に、果敢に挑む必要があるのだ。COIL型授業は、日本の学生にとって挑戦的機会を創出する新しい教育カテゴリーとして捉える価値がある。本学では2国間だけでなく、米国・モンゴル・タイ・日本(上智大学)を組

図表 オンライン環境により海外に学ぶ形態例



(注)MOOC(Massive Open Online Course)：大規模公開オンライン講座

大学教育の自由度の新展開

筆者がオンライン教育環境に最も期待するところは、学生の学びの自由度、教員の教育

み合わせたり、その授業後に学生間でネットワークが発達したりと、様々な試みが見られ、その展開に力を入れている。

の自由度を高めることができる点にある。大学教員は、一般に学期中はキャンパスでの授業に多くの時間を費やしており、その他大学運営への貢献や広く社会貢献などにいそしみ、研究時間の確保は積年の課題である。例えばオンライン授業の環境を整えれば、教員は自らの研究フィールドに向き、研究活動を行いながら、そして研究の生題材を使用しながら週に数コマの授業を自大学の学生達に提供できる。或いは従来、学期中は断念していた国際会議への参加においても、その期間中はオンライン授業とすることで出席しやすくなり、研究の国際展開に大きな力を生む。一方、学生は、海外での長期インターンシップやボランティア活動に参加しながら、現地から自大学で開講される授業にオンラインで参加し学修も継続することができる。本学では、1カ月程度各地に滞在しながら半年をかけて世界の5、6カ所を渡り歩き、グローバルリーダーの課題解決をそれぞれの地域課題に触れながら探るインターコンチネンタルラーニングプログラムを構想している。プログラムは全学学生向けに提供され、学生はプログラムを通じて得られる単位とともに、オンラインで自大学から提供される単位を積み上げることがもできる。もちろん自分の学術的専門性と現地での学びが有機的な結合を果たせば教育効果は倍増するであろう。図表に海外を対象としたオンライン環境の活用例を示す。このように、オンライン環境の駆使によって、在

学期間を延ばす覚悟を持たなくとも、国内外の大掛かりなプログラム、プロジェクトに参画し、自身の将来像を手練り寄せながら大学の学びに大きな付加価値を与えることができる。学生の学びの自由度が増すという意義は、とかく均質的になりがちで日本の大学キャンパスを物理空間的制約から解放し、学生が国内外に視野を広げ、主体的、自発的に学びの環境を獲得していくという点にあり、これこそが、グローバル人材の育成に大きな効果をもたらすのではないかと。

海外大学との競争環境下での模索と期待

オンライン環境を駆使して大学教育に新たな展開を示していくことは、喫緊の課題である。各国各大学が空間的制約のない学生の獲得競争や授業配信を始めており、我が国の高等教育も一刻も早くこの世界の土俵に乗るべきであろう。ここでは教育内容や教員、学生の質を問われる厳しい局面にも向き合うこととなる。しかしながら、このような機会には教育の質の国際通用性に新たな論点を生むであろうし、学生の獲得(日本人学生もその対象であることに留意が必要)という意味でも、海外大学との競争的環境下で自らの発展を模索することになる。これは、各大学の個性化を進めることにも繋がり、その多様な展開こそが日本の高等教育に対する最大のインパクトとなることを期待したい。